

石の核心に向き合うとき、私の心が彫刻される

彫刻家

絹谷幸太



*カラー口絵8・9頁に絹谷氏の創知彫刻「石と遊び」を掲載しています。あわせてご覧ください

彫刻との出会い

高校三年生の夏休みが終わり、そろそろ進路を決めなくてはいけない頃、父（絹谷幸三氏、洋画家、1943・）の故郷・奈良にゆかりのある彫刻家の柳原義達先生（1910・2004、兵庫県出身で幼少期を奈良で過ごす）の展覧会が東京・銀座のギャラリーせいほうで開催されました。そのときに父から「すばらしい展覧会になるだろうから見させていただったら？」といわれ、生まれて初めて彫刻展へ行きました。

立っていて、帰るタイミングも逃してしまつて最後まで残っていたんですね。すると、先生から声をかけていただいて、私も自己紹介すると、「今日はありがとう。今度アトリエに遊びに行らっしゃい」と仰られて、私はそれを真に受けて、日を改めて世田谷のご自宅兼アトリエへ伺いました。先生は快く迎え入れてくださり、美術のすばらしさ、彫刻の厳しさなどをずっと熱心に話してくださいました。

ときにはもう夜になっていて、ふと電車の窓に映る自分の顔を見ると、とても高揚して紅くなっていたんです。おそらく柳原先生の人柄はもちろんのこと、何よりも彫刻そのものに恋をしたのだと、いまでも思います。

その日はちょうどオープニングで、会場は大勢の方々でひしめき合っていました。私はその雰囲気圧倒されて、ずっと一人で会場の端に

話で、私も興味津々にお聞きして、最後に高光太郎の『ロダンの言葉抄』（岩波文庫）とロダンの画集をプレゼントしていただきました。それを抱えながら小田急線に乗って家路について

し、特に彫刻は素材の扱いから作品になるまで本当に大変ですから、親心から「やめておけ」といつてくれたのだと思います。

作品『理性の輝き2019』H5.5xW2.5xD2.5m
北野美術館 戸隠館(長野県)に設置したこの『理性の輝き』には、世界五大陸の花崗岩が用いられている(下段から、稲田石、中国産黒色花崗岩、インド産赤色花崗岩、ベトナム産黄色花崗岩、アフリカ産緑色花崗岩、カナダ産赤色花崗岩、ノルウェー産紺色花崗岩、オーストラリア産茶色花崗岩、アメリカ産白色花崗岩、ブラジル産青色花崗岩)。写真の積雪は約1.7mある



今秋の展覧会のために「ノルウェージャンローズ」を彫り始めようとする絹谷氏(アトリエにて)

それから美術の勉強をするために予備校に通い始めました。高校三年の秋ですから、他の人と比べるとスタートが遅いかも知れませんが、実は私、幼少期からゴルフにのめり込んでいて、大学へ進学するかプロゴルファーになるかも悩んでいたくらいで、とにかく毎日千球くらいボールを打っていたし、体力にも自信がある。ゴルフに限らず、どんなスポーツでも毎日の練習の積み重ねが基本で、それは彫刻でも同じなので、まずはデッサンなどの基礎の習練にのめり込み、結果、柳原先生が教鞭を取られていた日本大学芸術学部へ入学しました。

石の核心との対話を学ぶ

大学に入ると、まず塑像(粘土)、木彫、石彫、金属などの素材を学びますが、私は一年生から

石を彫ることに決めました。すると土谷先生は「ハンマー(せつとう)をコツコツ当てるのではなく、頭の上まで振り上げてしっかりと(ノミを)打て」と仰るんです。最初からうまく当たるわけではないですよ。だからもう本当に野球のグローブのように手が腫れて(笑)。そうなる感覚がマヒして痛くなくなるんですよ。でもやっぱりもう打ちたくないから、軍手のなかに練り消しゴムをしのばせたりして、そうするとまた「何やってるんだ」と叱られて(笑)。

そうこうしているうちに、二週間も続けると何となく彫れるようになるんですね。ゴルフも乗馬でもそうですが、最初は全身に力が入ってガチガチですが、そのうち力が抜けてくる。そういうコツがわかるようになる。

土谷先生の指導としては、ノミを寝かせて小手先だけでトントンと彫ると、どうしても表面だけの仕事になってしまいますが、そうではなく、ノミの先を石のかたまりの中心部、石の核に向けて打ち、石と対話しながら石を彫れというのが意図だったのだと思います。そのおかげで、私は表面の美しさを追いかけるのではなく、

絹谷幸太 Kota Kinutani
1973 東京都生まれ
1992 学術研究・学術調査 アルタ遺跡(ノルウェー)
1995 ユニオン造形文化財団助成 チリ・イースター島 巨大石彫文明の調査研究 / 第22回岩手国際石彫シンポジウム招待 / JR東日本 上野駅「故郷の星」制作設置(東京都)
1996 日本大学芸術学部美術学科彫刻コース卒業(芸術学部長賞受賞) / ポルトガル石彫シンポジウム シンペトラ'96招待
1998 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了 / (公財)ポーラ美術振興財団在外研修員1年派遣(ドイツ)
2002 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程彫刻専攻修了(同大学美術館作品買い上げ) / (公財)野村財団 新人美術家顕彰制度 野村賞受賞
2003 文化庁新進芸術家海外留学制度1年派遣(ブラジル)
2004 サンパウロ大学大学院(USP-ECA) post-doc修了 / 日本中国文化交流協会使節団にて訪中
2005 清春白樺美術館奨学生
2008 ブラジル日本移民百周年記念モニュメント制作設置(サンパウロ市カルモ公園)
2011 成都現代美術館作品買い上げ(中国) / フランス古美術調査研究旅行
2013 海外学術調査 オーストラリア・シドニー大学、マッコーリ大学 / 東京理科大学葛飾キャンパス モニュメント制作設置(東京都)
2014 海外学術交流 英国・オックスフォード大学、ケンブリッジ大学 / 学術調査 白亜の壁(Chalk hills)、ストーンヘンジ、ナショナル・ギャラリー等視察
2015 トヨタ鞍ヶ池記念館作品買い上げ(トヨタ自動車(株)) / 名古屋大学博物館作品買い上げ(名古屋大学)
2016 三紀商行(株)本社作品買い上げ(ミキハウス)
2017 ベトナムAPEC記念公園モニュメント制作設置(ダナン市)
2018 南方熊楠記念館作品買い上げ(和歌山県)
2019 北野美術館 戸隠館モニュメント制作設置(長野県) / 「真鶴・石の彫刻祭」招待(神奈川県)
その他、個展・グループ展多数

その石、その石が持っている核心に向き合うことの大切さを教えられました。

大学に入って最初に彫った石は真鶴の小松石(神奈川県) だったのですが、私は石を彫りながらすぐに悩んでいました。まだ十七歳の私が、何十万年、もっと古い石であれば何千万年、何億年も前にできた石とどう向き合えばいいのか。十七年、十八年しか生きていない人間が果して石を彫っていいものなのかと。

その悩みはいまも私のなかにあります。でも最初に土谷先生に教えられた、石の核心と対話するということから、とても大きな気づき

を与えられました。そして同時に、石をもっと知りたくなっていったのです。

また土谷先生はその頃、のちに恵比寿ガーデンプレイスに設置する作品「握手をする人」稲田石、1994をちよど稲田石の丁場(茨城県)で制作されていたのですが、なぜかまだ一年生の私を稲田石の石切り場に連れて行ってくださいました。

そのご縁で、当時、稲田石を採掘していた中野組石材工業(株)の丁場の親方や職人さんなどとお出会えたのも、その後の私にとってとても大きな財産になりました。

稲田石との出会い。 石を知ることと自分自身を知ること

石切り場に行くと、学校では経験できないような石との出会い、向き合い方が生まれます。また職人さんの仕事を現場で見ると、道具の焼き方や使い方など、いろいろな技術を教えていただきました。最初は外国かと思うほど方言が強くて、ほんとに半分くらいしか話の内容を理解できなかったんですけど(笑)。でも私はすぐに夢中になって、一年生からずっと大学の夏休みや冬休み、春休みなどを利用して、JR稲田駅の目の前にあった稲本旅館に泊まり込んで石切り場での作品づくりに没頭しました。

稲田石も当然、すばらしい石ですが、そこ働いている職人さんや丁場の環境、空気感など、すべてが私にとって魅力的だったのです。十二月の暮れになると、普段は命がけで働いているごっつい職人さんたちが女装して、お酒を飲んで、カラオケを歌い、大騒ぎしてね(笑)。でも、丁場などで私が危なっかしいことをしていると重機を止めて助けてくださったり、そういうこ

とも含めて、石という素材や仕事にさらに魅了されていったのだと思います。

そのような経験を通して、もつと石のことを知りたいと思いましたが、もつとうまく彫れるようになりたいと思いました。もつともつと、石に近づいていきたいと思っただけです。

石は、最初から本当に痛い思いをして、もう泣きそうになりながら始めたものですが、なかなか形がでせず、思い通りにいかず、まさに私自身を見るようでもありました。もつと石のことを知りたいという気持ちは、実はもつと

自分自身のことを知りたいと思う気持ちと同じだったのです。

そうやって思考をめぐらすと、石はもはや単なる彫刻の材料というレベルではなく、まさに自然の実材になります。ここ(石)にすべての地球の歴史や真実を凝縮した美しい世界があるのです。だからもつとそれに近づきたいと、それはいまでも思うことです。

そうしたことは柳原先生、土谷先生、そして中野組石材工業の職人さんたちとの出会いがなければ得られなかったと思います。

日本の石には、 大和の美しい心が詰まっています

稲田石をはじめ、日本の石には、本当に大和の美しい心が詰まっていると感じています。それはいま、外国のいろいろな石を彫っていると、なおさら感じるのです。大和の古の美しさ。アトリエで石に向き合い、また石切り場で彫っている、現代の日本人がなかなか掘り起こすことのできない眠ったままの美しさを、それぞれの石からひしひしと感じられます。



『ブラジル日本移民百周年モニュメント』(2008年、カラー口絵8-9頁参照)制作のための稲田石の運搬作業。絹谷氏は学生時代から稲田石の石切り場に通い、石に魅了された



作品『Brasil 2004-No.2』
H42xW45xD42cm、ブラジル産青色花崗岩

でも、私にはそれができないんです。この青い花崗岩を彫っていくと、その破片が青い絨毯のように私を取り囲み、それはもう本当に海のなかを漂っているような、または広大な宇宙をさまよっているような感覚になり、それこそまさに地球そのものを感じるからです。

そのとき、私はこのかけがえのない地球を戦争や環境破壊等で壊していく人類の愚かさや儂さ^{はかな}を思い知るのです。百三十八億光年ともいわれる広大な宇宙のなかで、生命が存続できる唯一の星が地球です。そこには人種や宗教の差による争いや、差別や偏見などがあるはずもない。そういうことを、石を彫っていると石から直に^{じか}教えられます。

そのように私が石と向き合っていて感じたこと、学んだことを造形化しています。それを作品として世のなかに発表し、一人でも多くの方に共感していただければいいなと思いつつ、石と対話しています。

アートとサイエンス。 作品の主体は、自分ではなく石。

でも、そうはいつでも、実際に石にはなかなか近づけません。たとえば、石のなかの小さな青い斑点がもとは何だったのかなど、そういうことは明確にはわからないところです。

そうしたときに、地質学者の足立守先生（名古屋大学特任教授）との出会いも、私にはとても重要な意味を持っています。日本だけではなく、外国の石も、できるだけそれぞれの石の組成や歴史などの情報・知識を足立先生に教えていただいています。先生は長年、岩石を研究されて



作品『創知彫刻 2020』（石の遊具、小松石）
2019年に「真鶴町・石の彫刻祭」（神奈川県）に招待され公開制作で30年ぶりに小松石を彫った

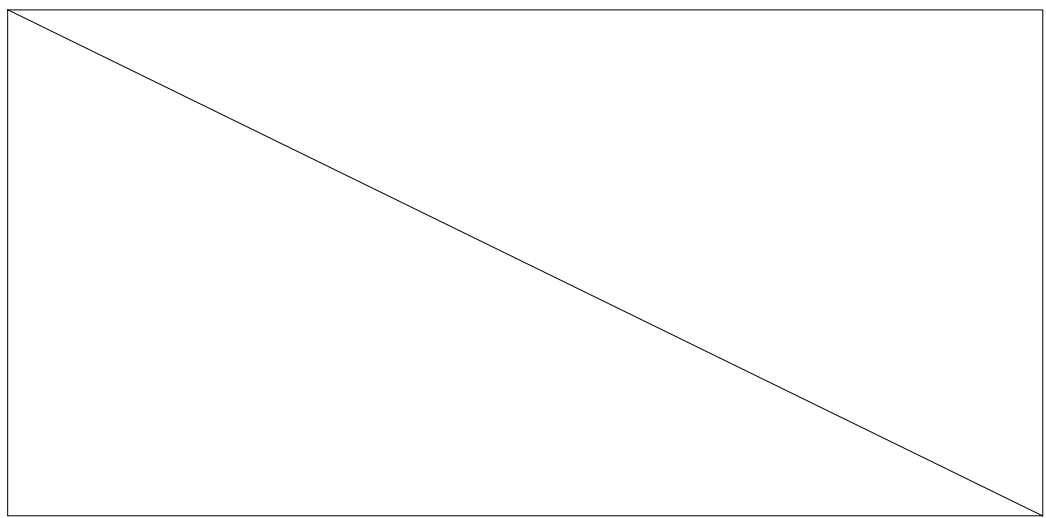


左：「真鶴町・石の彫刻祭」の公開制作で雨のなか制作する絹谷氏（2019年11月）

二〇一九年に「真鶴町・石の彫刻祭」に招待していただき、公開制作で本当に三十年ぶり、それこそ大学一年生で初めて彫つて以来、小松石を彫りましたが、改めて「なんていい石なんだろう」と感動しました。

それはやはり、石が土になり、山を育み、その養分が野菜を育てたり、川や海に流れ込んで魚を育てたりして、それらを私たちがいただくことで、日本の石が日本人の細胞の奥底に入り込み、しみわたっているから、そう感じられるのだと思います。それは私だけの感覚ではなく、気づかないけれど、日本人ならきっと誰もが持っているはずなんです。だから石屋さんや胸を張って日本の石のよさ、美しさを伝えれば、お客様もやっぱり「日本の石がいい」といつてくださるのではないかと思います。

一方で、私は当然、彫刻家として外国の石も彫ります。なかでもブラジル産の青色花崗岩はとても美しく、好きな石の一つなのですが、画家の父にいわせると、「この石を粉にして絵具にしたほうがいい」となるんですね（笑）。苦労して彫刻しなくてもいいのではないかと。





作品『マグマの合掌』
2014年、H358×W400×D160cm

赤色花崗岩レッド・ドラゴンと稲田石（名古屋大学博物館、カラー口絵8-9頁参照）

そういう科学的な知識、情報を足立先生から教えていただきながら、この「レッド・ドラゴン」でブラジル日本移民のモニュメントや作品『マグマの合掌』（2015、名古屋大学博物館、カラー口絵8・9頁参照）などをつくりました。前者は、日本から移り住んで苦労された移民の皆様とブラジルの方々の心をつなぐ象徴として、また後者は現在、中国（大陸）や朝鮮半島との問題が一向に解決しないなか、「太古の大陸移動でも大きく分裂したものを自然の力が修復する。その美しい姿から、人類も学ぼうではないか」というメッセージを込めた作品です。



作品『ブラジル日本移民百年モニュメント』2008年

6つの稲田石（茨城県産）の中心に赤色花崗岩レッド・ドラゴン（ブラジル・セアラ州産）を据える。ブラジル・サンパウロ州のカルモ公園に設置し、子どもたちの遊具でもある（カラー口絵8-9頁参照）

all photos: © KOTA KINUTANI
* p60, p61 下段, p64 下段は編集部

いて、私から科学的なことを教えてください。逆に、私は彫刻家として石に触れたときの感覚的なことをお伝えして、お互いにディスカッションして、その結果が私の作品にも反映されているのです。

『ブラジル日本移民百年記念モニュメント』（2008、ブラジル・サンパウロ市カルモ公園、カラー口絵8・9頁参照）は六つの白い稲田石を周囲に配し、その中心にブラジル・セアラ州で採れる赤色花崗岩「レッド・ドラゴン」を据えた、日本の国旗をイメージした作品ですが、その赤色花崗岩には黒い筋が龍の姿のように入っています。その黒い筋はクワライト（緑泥石）で、無数に入ったヒビに地下の熱水が浸入して結晶化したものです。

石自体は約五億年前にできたものですが、このクワライトは約二億年前の中生代ジュラ紀に形成されています。地球の歴史を遡ると、ちょうど大陸が移動して分断してできた形跡に当たるわけです。ですからこの黒い筋は「断層の化石」というわけで、一度離れ離れになったものをつなぎ合わせているのです。

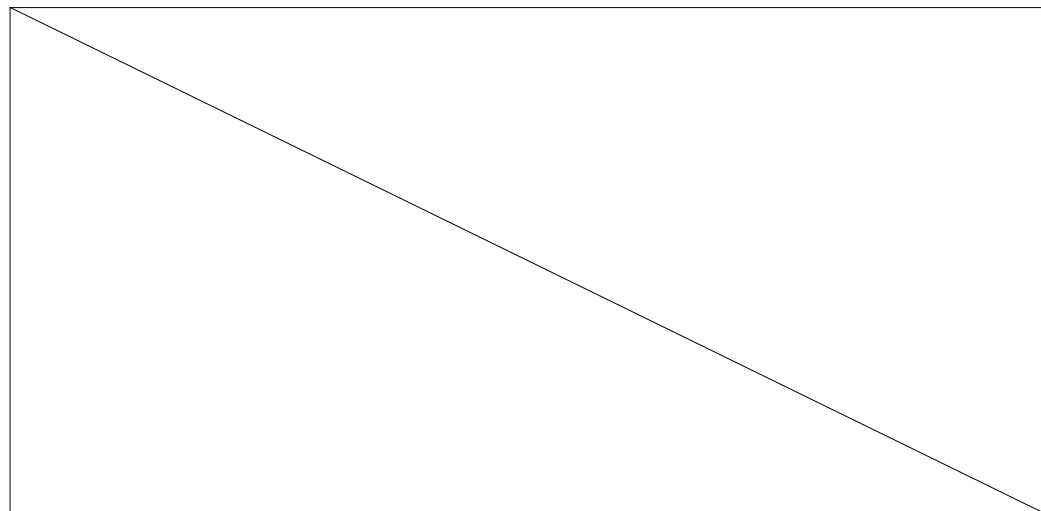
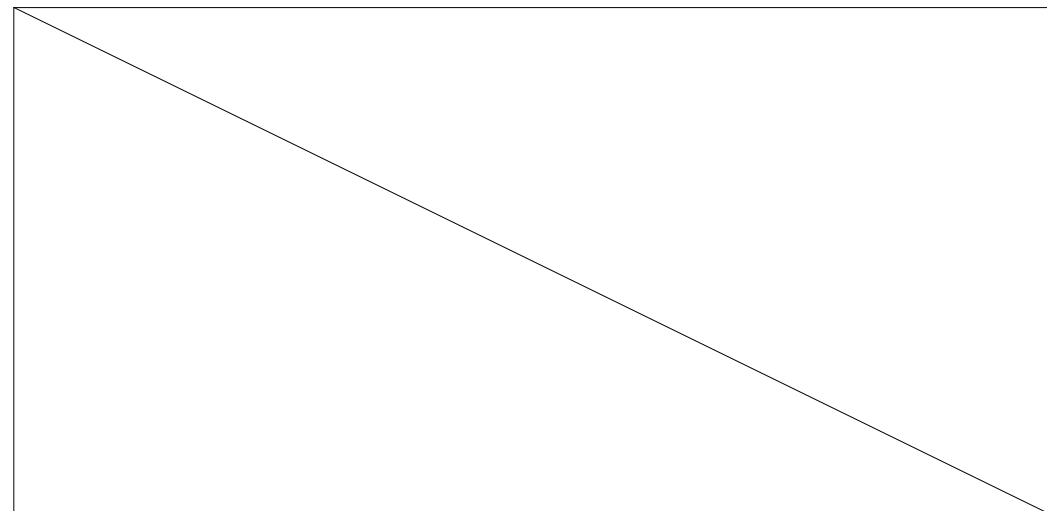
アートとサイエンスということ。足立先生の科学的知見と私の感覚とがミックスし、新しい彫刻作品として生まれ変わる。そうすることで、石（作品）にさらに価値や魅力が加わり、人々に共感していただけるのではないかと、というのが私の作品づくりの姿勢です。

作品というものは、やはり時代の声や音になるものですから、全世界の皆様が共感するような作品を、私はつくりたいと思っています。できるなら私自身を透明化して、作品そのものが現代、そして未来の人々の声やムーブメントにつながればいい。

ですから、私の彫刻では石が主体です。そして、私が彫刻されているのです。石の核心に向き合うとき、私の心が彫刻される。そうなればなるほど、すばらしいと思っています。

どうすればその石が生きるか、 石の声に耳を傾ける

石切り場でよく感じることは、いい石とは何だろうということ。少しでもキズやヒビ、あるいは黒玉などが入っていると、すぐに「使





作品『スライダーⅠ』『スライダーⅡ』2014年

ひとかたまりの稲田石（茨城県産）を2つに割ってつくった作品。絹谷氏は、作品に触れて遊んだり、叩いて音を奏でるなど、五感のすべてを使って石と対話できる「創知彫刻」を作品づくりの重要なテーマとする。そのため「子どもにも大人にも、作品には触れてほしい。そして、私が石との対話から学んだものを感じ取ってほしい」と話す

対する日本の貢献を期待する、私自身の強い思いを込めています。

石は教科書。作品には触れてほしい

私は常々、作品には触れてほしいと思っています。特に子どもたちにはよじ登ったり、抱きついたりして遊んでほしいですね。

幼少期に私はイタリアのローマやヴェネツィアに住んでいました。父の絵の勉強のためですが、その当時、広場の噴水彫刻によじ登って遊ぶのが私の日課で、白い大理石に登っている自分の姿が水面に映り込むと、まるで雲に乗って飛んでいる孫悟空になったようでした。

それから大学時代に東洋の古い哲学「雲根過影」を学んだときに、それは大地の石と雲とがつながり合うことを説いた思想なのですが、無心になって大理石の彫刻で遊んでいたときの感覚を思い出しました。つまり何千年も前に人類が残した知恵、思想が、すでに幼少期の遊びを通して私の心に刻み込まれていたんです。

その無心で石と遊んだ感触と実体験がベース

えない」といいますね。キズなどは、そこから水を吸って経年劣化を早める要因にもなるので仕方ないことも知れませんが、石を主体とすると、考え方も変わってくると思います。

「自然」とは本来、まったく「不均質」なものなのです。そして、そこそが本場の「価値」だと、私は思っています。

私たち人間でも心や身体にキズを負っている方、いろいろな思いや悩みを持っている方がたくさんいらっしゃいます。逆に「いい人」ばかりを集めても、まあ、霞が関とはいいたくない（笑）。やはりいろいろな存在が互いに補い、バランスや調和を取りながら成り立っているのが、美しい自然のあり方だと思っております。

私も作品をつくるときに、石に大きなヒビが入っていたことがあります。取り替えるべきかを非常に悩みましたが、その石を大切に採ってくださいと職人さんのことも考えて、時間をかけてそのキズ口から接着剤を流し込んで、ステルスで固定して使いました。

大きなキズを持った石は必ずあります。でも

それを「使えない」と石切り場の谷底に投げ捨てるようなことをせず、作品として生かし、子どもたちがよじ登ったり、笑顔になって遊んでくれたら、それがその石にとってどんなに幸せなことなのか。それをいつも考えています。

そういう考えを持つのも、私の心がその石に彫刻されているからです。一つひとつの石に向き合い、どうすればその石が生きるか、石の声に耳を傾け、悩み、考えて、いろいろな思いのなかで造形化することを考えています。

特にいま全世界でコロナや環境問題など、まさに地球的な危機に直面しているなかで各国が一つになって力を合わせなければいけない状況にあり、それに対するメッセージとして、いま私は日本を含め、世界中の石を組み合わせて作品をつくっています。足立先生に教えていただいたそれぞれの石の成り立ちや存在意義、または美しさや力の一つに集めた作品づくり、その作品がきっかけとなって、何か新しい思想や哲学に目を向ける気運が生まれればいいかなと思っています。

作品『友情の懸け橋』では、世界六大州の石



作品『友情の懸け橋』2019年
世界六大州の石を5種類の日本の石の鏝（左）がつなぐ。世界平和に対する日本の貢献を期待する思いを込める

（ブラジル産青花崗岩、ドイツ産石灰岩、南アフリカ産片麻岩、オーストラリア産花崗岩、インド産砂岩、アメリカ産花崗岩）を使って世界平和を願う人々の心を一本の大きな懸け橋として表現しています。そして、その懸け橋が壊れることのないようにつなぐ鏝として、五つの日本の石（宮城県産「稲井石」、茨城県産「稲田石」、岐阜県産のチャート、岡山県産「万成石」、愛媛県産の三波川結晶片岩）を使っています。その鏝の石には、世界平和に

になり、私の彫刻家としてのテーマである「創知彫刻」という概念が生まれました。それは私の作品(石)に触れて遊んだり、叩いて音を奏でたり、においをかいだりと、五感のすべてを使って対話していただく彫刻のあり方です。

子どもたちは無心になって野山を駆けまわり、何かによじ登り、新しい遊びを発見しながら五感を通じて大切な物事を感じ、学んでいきます。一方的に石のこと、地球のことなどの難しい話をして、興味がなければすぐに忘れてしまいます。押し付けの教育ではなく、遊びのなかで石に興味を持ってもらえれば、さらにより深いところへと入っていきます。

石に興味を持つと、国語、算数、理科、社会だけではなく、石の結晶を見ながら宇宙の話までできるようになります。そういうことは、足立先生とのディスカッションでもよく話題になることです。

だから、石は教科書なんですね。そしてそれは大人にとっても同じです。作品には子どもは

もちろん、大人にも触れていただき、私が石から感じたり、学んだことを感じ取っていただきたいと思っています。

最期の思いを石に託す際、日本人なら「日本の石がいい」

私は海外のいろいろな国へ行っていますが、必ず古い墓地へ出かけます。新しい墓地では輸入材が多いですが、昔の墓地に行くと、その隣でどのような石が採れるかがよくわかるからです。またアルゼンチンの墓地などは、もうお墓が美しい芸術作品ですね。海外では、著名な彫刻家もよくお墓の仕事をしていました。

お墓というものは、その方の人生そのものを表すものです。私も祖母のお墓をつくりましたが、故人がこの地球上に誕生した証を未来永劫に伝えるものだから、それはとても大切にして、その方の思いや生きた姿勢を表現しなくてはなりません。そしてコツコツと時間をかけてその一生に敬意を表してつくり、なおかつ雨の日も、

風の日も耐え忍ぶことが前提ですから、お墓には石が最も適した素材だと思います。

いまは中国でもいろいろなお墓がつくられているようですが、それだけでは、日本の石屋さんには厳しくなるばかりではないでしょうか。私には石切り場とご縁がありますから、以前から本当に大変な時代だと思いつながら見続けています。国内の石材業が活性化するようなお手伝いができればいいなと思っています。

人類は長い歴史のなかで、ずっと石に思いや願いを託してきました。きっと誰しもが、もし選べるのなら、人生の最期にどの石のなかで眠りたいかを考えるはずです。人間の生命は儂いものですから、その最期の思いを石に託す際に、日本人であれば、前でもお話ししましたが、やはり「日本の石がいい」と思うのが本心ではないでしょうか。

石は、神のような存在。

私にとって石とは、いわば神のような存在です。キリスト教でいうところの神というわけではなく、だからといって仏教的でもありません

が、私にとって石は本当に神のようです。石は、すべての生命が生まれ、また帰っていく母なる宇宙そのものだからでしょうか。

ですから、もっと石に近づきたいと思うのです。そして、究極は石になりたい(笑)。冗談のようですが本気です。

そして彫刻の制作は、神を彫らせていただくわけですから、その核心に真摯に向き合わずにはなりません。慣れや野心を捨て、自分の心が彫刻されるように石との対話を重ねる。雨の日も風の日も関係なく、石に失礼のないように向き合わないといけません。

限られた人生ですから、これからもまだまだ石に関わっていきたいと思っています。石についていただくこともあり、どうしても増えていくんですよね(笑)。だから、彫りたい石がまだまだあります。

そうした石との一つひとつの出会い、対話を楽しみながらつくり続けたいと思います。

(聞き手＝編集部・安田寛)

◎絹谷幸太公式ウェブサイト

<https://kotakinutani.com>



作庭(東京都世田谷区、個人邸) 2009年